

国際協力特別賞

「ミンナ」を消すレシピ

小石川中等教育学校

阿部 真人 3年

僕は自分が嫌いだった。僕は異常に背が高すぎた。小学校四年生で担任の男性教師をぬかした。五年生で日本の成人男性の平均身長に五センチ差をつけた。背が高いのを少しでも誤魔かそうといつも猫背で生活していた。苦しかった。

ある日、偶然私はテレビでバレーボールの番組を観た。衝撃が走った。そこでは当時の僕の身長を二十センチも超えた選手達が戦っていた。彼等は背をピンと伸ばして、心からプレイを楽しんでいる。勇気を貰った。

次の日、朝早く学校に行った僕は先生に自分の悩みを話した。先生は静かに言った。「他人と違っていいんだよ。」

決定的だった。涙が溢れた。僕はそのときの気持ちを、生涯忘れないだろう。

先生の言葉のお陰で僕は前向きになれた。勉強に精を出し、都立の有名中学に進学できた。部活はバレーボール部を選んだ。いつか誰かに希望を与えられる選手になりたいと考えている。

僕のように容姿にコンプレックスを抱える人は多い。毎日乗る山手線では「美容整形」に関する広告をよく見る。僕らにとって「美容整形」は一種の「救い」だろう。僕は知っている。現代社会には驚く程排外的な面が存在していて、「ミンナ」とは違う人間に厳しいということ。容姿という最も隠しにくい違いを持つ僕等には、生き辛い世の中だ。自分で自分を認めることさえ難しい。

それでも、先に述べた「救い」に頼るのは違う気がする。問題なのは違いを持った僕等では無い。個人個人を尊重できない環境であり社会だ。自己や他人を個として認められる世に作り変えることこそ唯一の解決策だ。

僕等は家も食事も命の保障もある。しかし全員が幸せでないのもまた真実。アフリカの子供達が最低限度の生活を得た先へ。一人一人が自尊心を持てる社会のレシピを考えなければならないのだ。僕は色んな人とそのレシピについて話し合ってきた。

最近、「ミンナ」なんていないと知った。皆が「ミンナ」との違いを持っていて、悩んでいる。全員が本当は存在しない「ミンナ」に合わせようと必死なのだ。それに気が付いたとき、一つのレシピがひらめいた。他人に自分の特徴「ミンナ」との違いについて話すのだ。これをやると相手も自分の特徴を話してくれる。

これを続けて数週間。不思議なことが起きた。クラスから「ミンナ」が消えた。全員が「ミンナ」と違ったからだ。嬉しかった。僕の目にはクラスが、いつかの未来の縮図

に見えた。もちろん、レシピは一つだけではないだろう。これから僕は新しいレシピを考え、「ミンナ」を消していく。先ず、学年、学校からだ。理由は、これが僕が考える「私達が世界の幸せのためにできること」だからだ。